

事業結果要約報告書

受付番号

2018 KJ-002

—科学技術振興関係—

平成 31 年 4 月 27 日

所属機関名 岡山大学大学院

申請代表者

役 職 環境生命科学研究科 教授

フリガナ キムラ コウジ

氏 名 木村 康二

マツダ財団から受けた 助成金 150 千円 による事業結果について、
次のとおり報告します。

助成事業名	岡山大学農学部ジュニア公開講座 (事業期間：2018年7月28日～2018年7月29日)	
	計 画	実 施 結 果
事業内容	日時 2018年7月28日～2018年7月29日 場所 岡山大学山陽圏フィールド科学センター津高 牧場（岡山市日応寺） 対象 小中学生およびその保護者 定員 30名（保護者含む） 内容 牛の体と餌について 牛の個体識別（見分け方）について	日時 2018年7月28日 場所 岡山大学山陽圏フィールド科学センター津高牧 場（岡山市日応寺） 対象 小中学生およびその保護者 参加者(人) 28名 内訳（保護者； 14人）（生徒； 14人） 内容 牛の体と餌について 牛の個体識別（見分け方）について 講演；2件、発表； 件、シンポジウム； 件

事業の目的・ねらい

近年、我が国の畜産において、口蹄疫の蔓延、O-157による食中毒、鳥インフルエンザの発生や、牛乳の供給不足によるバターの商品薄など様々な問題が発生している。これらは同時に消費者に畜産物に対する感心を強めることとなっている。また、2005年には食育基本法が制定され、子どもたちが食に関する正しい知識と望ましい食習慣を身に付けることができるよう、学校においても積極的に食育に取り組んでいくことが重要となっている。このような状況の中で、食といのちについて、食の安全・安心について、またそれを支える様々な科学技術について、親子で考える機会を設けることは感受性高く成長期にある子供たちにとって極めて重要である。そこで、実際の牛の生産現場で食といのちを学ぶ機会を設け、食育の一助となるために本事業を実施する。

事業の概要

当初の予定では7/27および28の両日開催を計画していたが、台風が岡山県上空を通過するとの予報があり、過日発生していた真備水害もあって、2日開催を急遽7/27だけの開催とした。実習の内容を一部変更はしたが、1日で2日間の内容を圧縮して盛り込んだ。

参加者に牛という動物を理解してもらうために、その体の構造やその生産体系について、牛の個体の見分け方や我が国独自の牛の個体識別番号・食肉のトレーサビリティについて、平易に講義を実施した。また、牛は人間が利用出来ない草を食料に効率的に変換する家畜である。当該牧場は場内で牛の餌を独自に生産しており、干草、サイレージなど多様な形態で牛に給餌している。実習では牛に触れてもらうのと同時にそれらの餌を用意して実際に給餌体験をしてもらう牛の個体登録(血統登録)には鼻紋が用いられている。ヒトの指紋と同じように、牛の鼻のしわの文様(鼻紋)は個体により違いがあるため、現在でも血統登録の際はこの鼻紋の採取が行われている。実際に参加者に牧場で飼育されている牛から鼻紋の採取をしてもらう。数頭の牛からそれぞれ鼻紋を採取してもらい、個体によりどのくらい違うかを実際に体験してもらった。

成果・効果

牛の体のつくりや、与えられている餌(濃厚飼料・粗飼料)について実際に手に触れて皆さんが食している牛肉がどのようにして生産されているのかについて理解が得られたと考える。さらにトレーサビリティや牛の個体識別、今回では特に鼻紋を各人採取してもらい、牛個体それぞれの鼻紋の違いを観察してもらうことで、個体識別がどのように行っているかという畜産現場の生の技術を体験してもらった。特に鼻紋の採取は始め参加者全員が牛を怖がり躊躇していたようだが、こちらでのデモを見て恐怖心を取ってもらい、最終的に全員に採取をしてもらった。採取してもらった鼻紋はそのまま持って帰ってもらい、夏休みの課題研究の一つとして利用していただけるように取り計らった。夏休みの課題研究としてこの公開講座に参加されている方も多く、課題発表を通して、より多くの子供たちに畜産に対する情報を提供できたのではないかと考えている。

今回は搾乳や乳製品の試作など、よく見受けられる実習内容ではなく、参加者がこれまで知らなかった畜産の一面をお見せすることが出来た。特に今回は保護者同伴での参加であり、子供たちだけでなく保護者に対しても畜産についての情報提供が出来たことは有意義であったと思われる。

写真、図



講義風景



牛の餌について



鼻紋採取



放牧地の牛観察